＜論評＞発話理論にもとづく談話標識研究について
—Ranger (2018) の論評—

宮腰 駿

1. はじめに

本稿は Ranger (2018) (以下、本書[1]と略す) を論評することを目的とする。*Discourse Markers : An Enunciative Approach* と題する本書は題名からも示唆されるように「発話理論[2]」にもとづいた英語の「談話標識 (discourse markers)」に関する研究書である。ここでいう「発話理論」とは 20 世紀後半のフランスを代表する言語学研究者の 1 人である Antoine Culioli (1924-2018) を中心に発達した一般言語理論である。本書の目的の 1 つには発話理論を英語圏に紹介することが掲げられているが (p.v)、この点は発話言語学研究会の活動目的の 1 つである「言語学における French Theory の宣揚」と共鳴するところである[3]。

また、本書がテーマとする「談話標識」は時を経るにつれて次第に注目度が高まっている言語研究の対象といえる[4]。しかし、この「談話標識」という単位については、その定義や機能に関して誰もが認める共通した見解が存在しているとはいえず、依然として多くの研究課題が残されている。こうした状況においては、ある特定のアプローチだけに依拠した研究を積み重ねるのではなく、むしろいくつかのアプローチから研究を行っていくことが有効であると考えられる。このような背景をふまえると、とりわけ談話標識研究においてはアプローチに関する議論を欠かすことができない。この点に関して、本書は 1 章および 2 章で、談話標識に関する一般的な問題の体系的な記述と本書が採用している理論的立場の記述を詳細におこなっており、アプローチに関する議論を重視していることがうかがえる。本書の目次は以下のとおりである。

1 Introduction
2 The Theory of Enunciative and Predicative Operations
3 *Anyway* : Configuration by Target Domain
4 *Indeed* and *in fact* : The Role of Subjunctive Positioning
5 *Yet* and *steel* : A Transcategorial Approach to Discourse Phenomena
6 Discourse Marker Uses of *like* : From the Occurrence to the Type
7 *I think* : Further Variations in Subjective Endorsement
8 General Conclusion

---

[1] 出典が表記されず、ページ数のみが表記されている場合はすべて Ranger (2018) からの引用である。
[2] この理論は「発話述定操作理論 (Theory of Enunciative and Predicative Operations, 略称 TEPO)」とも呼ばれるが、本稿では便宜的に「発話理論」という表現を使用する。
[3] 発話言語学研究会 HP https://linguistique.web.fc2.com/ 最終閲覧日 2022/12/02
[4] 談話標識の研究状況については本書の 1 章および 2 章のほかに Hansen (1998), Schourup (1999), Dostie (2004), Blakemore (2006), Fischer (2006), 松尾ほか編 (2015) の Appendix I等が参考になる。

本書の全体的な構成としては、まず基礎的な議論が 2 章まで行われたのち、3 章以降の各章において個別の談話標識に関する議論が行われている。各章における記述においては、それぞれの形式に関する先行研究の批判的考察と実例に基づく具体的な議論が展開されている。各章の副題には当該標識の分析において特に問題となる理論的な概念が提示されている。

本稿はこの Ranger (2018) について、2 つの観点からの論評を行う。まず 2. において、とりわけ 2 章をとりあげながら談話標識研究の課題の 1 つである「多機能性 (multifunctionality)」について検討する。つづく 3. において、個別の談話標識の記述において注目に値する論点を 2 つとりあげる。なお、本稿では個別の談話標識の分析精度について議論を行うことよりも、むしろ談話標識研究に関する一般的な論点を、本書を通じて取り上げることを優先する。また本稿は発話理論の紹介を行うことを目的とはしない[5]。

2. 発話理論にもとづく談話標識の「多機能性」に関する考察

談話標識の研究においてはこの種の形式が持つ「多機能性」の取り扱いが問題となる。ここで言う「多機能性」とは簡単に言えば、ある 1 つの形式が複数の用法を持っていることを指す。例えば以下の anyway の 2 つの用例はどちらも談話標識としてみなされ、それぞれ異なる機能を果たしていると記述されている (p.8)。言い換えを使えば、(1a)は even though と等価であり、(1b)は in any case あるいは at least と等価であるとみなせる (idem)。

(1) a. Maybe he would feel better if he had something. He put a forkful in his mouth. It was cold. He ate it *anyway*. (idem)

b. “I think a course of electroconvulsive therapy is what young Byrne needs.” “The mental hospital ?” Sister Cooney looked concerned. “Yes, but don’t tell him that – not for the moment, *anyway*.” (idem)

こうした談話標識の多機能性という特徴をふまえると、どのようにして談話標識の機能・意味の記述を行うのかという問題が研究を進めるうえで生じることとなる。この点について本書は、多機能性について考察する際に、「同形異義 (homonymous)」「多義 (polysemy)」「単義 (monosemy)」という 3 つの見方があることを指摘している (p.44)。そして、このうち特に後者 2 つの立場について批判的な考察が行われている。批判の詳細をまとめる余裕はここではないが、多義論については(2a)、単義論については(2b)のように、それぞれに 3 つの批判点が挙げられている。筆者は特にそれぞれの(iii)の論点に批判の重きを置いている。多義論に関する(iii)の論点については、プロ

[5] すでに英語で書かれた発話理論の研究書や概説書は存在している。例えば Cullioli (1985) の講義録を系統的にまとめ、英訳している Culioli (1995) や、英文法を発話理論にもとづき記述した Bouscaren et al. (1992) 等がある。簡潔に理論の概要を知る際には Groussier (2000) による紹介的な論文が参考になる。また本書では Culioli, Paillard 等のフランス語著作からの引用がすべて英訳されており、この点も発話理論の紹介という点で本書の価値を高めている。また日本語文献では例えば青井 (1978, 1980), 青木 (1994), フックス, ル・ゴフィック (2003), 髭ほか (2010), タンバ (2013), 伊藤 (2015) 等が発話理論を知るうえで参考になる。

トタイプ論を鳥類のような自然界のカテゴリーを対象とした時と同じような形で、談話標識の用法分類で使用されるメタ言語的なカテゴリーの議論に適用することが問題視されている (p.48)。一方、単義論に関する(iii)の論点では言語変化と核的な意味の関係について批判の焦点が当てられている (p.51-52)。そして、筆者はどちらの議論においても文脈の役割が決定的であるにもかかわらず、意味と文脈の関係性がほとんど明示的な理論化の対象になっていないことを問題視している (p.53)[6]。

(2) a. (i) to abstract away from contextually situated meanings in the same way as monosemy-based approaches; (ii) to provide a metaphorical model for the relatedness of different meanings, and only *ad hoc* mechanisms for derivation one meaning in preference to another; (iii) to superimpose a model inspired from work in cognitive psychology on the prototypicality of extralinguistic entities to constructed metalinguistic categories, instead of questioning the relevance of these categories themselves. (p.48-49)

b. (i) too abstract to be useful; (ii) cognitively implausible; (iii) unsatisfactory in accounting for language variation, diachronic, geographical or individual. (p.52)

こうした考察の後に筆者は発話理論における意味とコンテクストの関係性に関して以下のように述べている。引用が述べるようにこの理論においては常に発話をある状況・文脈の中でとらえることに重みが置かれている[7]。そして、本書ではこうした発話という問題の中で談話標識の意味・機能の問題が考察されている。

(3) In the TEPO there is on principle no such thing as an unsituated utterance. An utterance by definition implies an utterance-object E and an utterance-event $\mathscr{E}$, with its situational parameters (subjective, spatio-temporal and textual). The lexical items that compose an utterance are also situated axiomatically within the situated utterance. This methodological position means that it is impossible to consider an utterance, a linguistic item or indeed a meaning without *contextual* or *situational* determination. (p.53)

では発話理論ではどのようにして談話標識の多機能性を取り扱うことになるのか。この点について、重要な概念となるのが Schematic form (fr. forme schématique, 図式形式, 以下 FS と略す) で

[6] For both – and whether the mechanisms engaged are based on cognitive or pragmatic principles – the role of the context in utterance interpretation is crucial. Despite this methodological imperative, however, the relationship between meaning and context rarely forms the object of explicit theorisation.

[7] こうした特徴から発話理論を「語用論」の一系統として扱う議論も想定できるが、こうした過剰な語用論の拡大には慎重になる必要がある。本稿ではこれ以上の議論を行えないが、発話理論を語用論の一流派としてみなす場合はその「語用論」が言わんとするところがまず明らかにされるべきである。

ある[8]。ここではこの概念を検討するために、発話理論の立場から意味記述について考察した Franckel (2002) の以下の記述を取り上げる。以下の引用が述べるように、発話理論におけるある形式の同一性は意味構築上のインタラクションの中における当該形式の役割によって定義されるものととらえられている。そして、FS という概念は「単位の同一性 (l'identité d'une unité)」を表すものである (ibidem, p.12)。

> (4) 中心的な仮説はある単位の同一性は何らかの基礎的な意味によってではなく、(この単位が) 使用されている発話文の意味を構成しているインタラクションの中で、この単位が果たしている固有の役割によって定義されるというものである。
> L'hypothèse centrale […] est que l'identité d'une unité se définit non par quelque sens de base, mais par *le rôle spécifique qu'elle joue* dans les interactions constitutives du sens des énoncés dans lesquels elle est mise en jeu. (ibidem, p.9)

そして、この概念を議論する際に注目すべきであるのは、この概念の名づけが 2 つの構成素から成り立っているという点である。ここで筆者によって英訳された Paillard (1998, p.18) からの引用を取り上げる。この引用が指摘するように、FS という枠組みからみたとき、ある語はコンテクストに対して図式 (schema) を通じて働きかけるだけでなく、形式 (form) としてその存在をコンテクストから受けとるというインタラクティブな関係を築くものとしてとらえられることになる。したがって、この名づけが示すのは FS という概念のインタラクティブな性質であり、この概念は「相互依存的な構成性の中での語彙の意味的貢献を定義するもの」 (伊藤 2015, p.140) である。

> (5) The invariant is defined as a schematic form. This name highlights the complex interaction between the word and the context: on the one hand, the word structures the context in as much as it corresponds to a schema, on the other, as a form, it receives its substance from the context[9]. (p.58)

ここで注意すべきであるのは、ある形式に 1 つの核的な意味を付与しようとする単義ベースの

---

[8] 発話理論はしばしば Émile Benveniste との強い結びつきを指摘される。そして、この FS の概念について考察する際には以下の Benveniste (1948) による記述が参考になる。

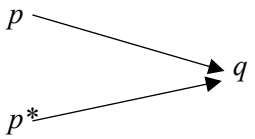
> 2 つの現用の形成法が競合して機能する場合、これらの形成法は同じ価値を持つことはできないだろう。そして、相関的に、1 つの同一形式に割り当てられた異なった複数の機能は 1 つの共通した基盤を持たなければならない。言語学者は、概して明白ではなく、しばしば深く隠れているこれらの価値を見出す役目を担う。
> quand deux formations vivantes fonctionnent en concurrence, elles ne sauraient avoir la même valeur ; et, corrélativement : des fonctions différentes dévolues à une même forme doivent avoir une base commune. Il incombe aux linguistes de retrouver ces valeurs, généralement peu apparentes et souvent très cachées.
> (ibidem, p.6)

[9] L'invariant est défini comme une forme schématique, cette dénomination soulignant l'interaction complexe entre le mot et le contexte : d'un côté le mot structure le contexte en tant qu'il correspond à un schéma, de l'autre, en tant que forme il reçoit sa substance du contexte. (Paillard 1998, p.18)

意味記述と FS ベースの意味記述の違いである。筆者が言うように、たしかに発話理論は単義ベースのアプローチに近いととらえられるが、この見方には「但し書き (*caveat*)」を付す必要がある (p.45)。FS はここまでの議論から示唆されるように「語の意味 (sens du mot)」でもなければ、その時々に生じる「特異的意味 (valeurs singulières)」でもない (Franckel 2002, p.12)。あくまで意味構築におけるコンテクストとある語の間にある相互授受的な関係を描こうとするのが FS 論の焦点である。そして、FS は実体的・結果的な意味のかたちをとって記述されない。Ranger (p.61) は FS を「操作的な青写真 (operational blueprint)」であると指摘しているが、たしかに実際の FS とこれに基づく諸機能の記述においては、個々の意味を構築する際にいわば FS という「設計図」に則りどのような操作が行われるのかという点が際立っている。つまり、外形的にある 1 形式に 1 つの FS を提出しているという理由だけで、この議論を単義論に含めることは不十分なとらえ方である。

では具体的にどのように各形式の FS は記述されているのか。3 章以降の各章では FS 論の観点から対象となる談話標識の様々な価値がとらえられている。ここでは一例として、3 章で扱われる anyway の分析を一部取り上げる。まず anyway の FS は(6)のように記述されている。この記述から示唆されるのは、この FS が語るのは anyway のふるまいを痕跡として再構築できる操作だけであり、結果的な意味はこの FS には書き込まれていないということである。そして、この記述における p*や q は操作の「被演算子 (operands)」を表す (p.103)。この FS はインフォーマルに言い換えれば「p からでも p* (p 以外) からでも q に至る」ということを述べている。そして、この FS を図式化すれば図のようになる。

(6) The marker *anyway*, in a construction of the general form *p* anyway q* marks an operation whereby an end-point *q* (often, but not always, a conclusion) is determined indifferently relative to more than one possible path of access: *p* (which normally leads to *q*) or, something else, o*ther-than-p*, noted *p**. (p.102)



(p.104 に従い本稿筆者が作成)

ではこの FS からどのように様々な価値が構築されることになるのか。ここでは例示のために anyway が持ちうる「譲歩 (concessive)」の価値と「訂正 (corrective)」の価値に着目する。まず前者の例は以下の(7a)である。この例では、ただ鳩を撫でようとしただけだったが、鳩は飛んで行ってしまったという事態が記述されている。この例における q は「鳩が飛ぶ (*it fly off*)」であり、p* は「私は鳩を傷つけない (*I not hurt it*)」である (p.106)。通常であれば q は鳩を「傷つけようとする何らかの意図 (some intention to harm)」にあたる p の結果として生じると考えられる (idem)。しかし、ここでは p からでも、p*つまり non-p からでも q にたどり着くことが表されている (idem)。このようにして、p と non-p (p*) によって、「何であれ・いずれにせよ」という譲歩の価値が構築

されている。一方、(7b)の例は訂正の価値を示している。この anyway は at least という表現で言い換えることができる (p.110)。ここでの q は最初の文であらわされている内容である (idem)。この q の論拠として、ここでは p として or 以前の内容が提示されて、のちにこの p に含まれる crass comments を訂正しているのが p*の crass assumptions である。ここでの p と p*の関係はいわば「断定のやわらげ (downtoning)」と見なすことができ、本書ではこうした p*は p－ (マイナス) と記述されている (p.110-111)。この例では p が過剰であるとみなされ、調整のために p－が導入されているととらえることができる。

(7) a. We stare at each other for quite a bit – me and this pigeon. […] It looks so sad there, all cold and lonely, that I hold my hand out to stroke it, but it flies off. I wasn't going to hurt it or nothing – I was just going to stroke it, but it flew off *anyway*. (p.105)
b. I usually don't mention the fact that I once trained as a social worker. It's another thing people tend to make crass comments about, or crass assumptions *anyway*. (p.109)

このように本書では FS という概念に基づいて、ある標識と文脈のインタラクティブな関係を重視した形で各談話標識の多機能性が検討されている。

3. 各談話標識の記述から見出される一般的論点に関する考察

前章では本書における談話標識の記述において中核的な役割を果たしている FS という概念について検討した。本章では各談話標識の分析において議論されている談話標識研究一般に通じる論点を大きく 2 つ検討する。

3.1 コーパス調査と FS 論の連接

まず、最初に取り上げるのは本研究におけるコーパスの活用方法という論点である。大規模コーパスの使用が談話標識研究において有用であることは言うまでもないが、常に念頭に置く必要があるのは「どのようにしてコーパスを活用するか」という問題である。Ranger (p.78) が指摘するように発話理論は corpus-driven と形容できる理論ではない。しかし、コーパスと無縁というわけでもない。実際、発話理論の枠組みからフランス語の談話標識を論じる Paillard et al. (2012) や Paillard (2021) ではフランス語の書き言葉コーパスである *Frantext* が活用されている。こうした研究状況において、本書において特徴的であるのは、コーパス調査から得られた知見を積極的に各形式の FS に関する議論に接続している点である。

例えば、indeed および in fact を扱う 4 章では、この 2 つの類似形式が持つ差異について検討する際に、コーパス調査がいかされている。本書では概略どちらの形式も 2 つの要素 (p と q で記される) を関係づける機能を持つととらえているが、差異として、indeed は「同定 (identification)」の関係をマークするのに対して、in fact は「異化 (differentiation)」の関係をマークすると指摘している (p.145)。実例を通じてこのことを例示するならば、例えば、(8a)では「強化 (reinforcement)」

の価値を indeed は持つとされる (p.146-147)。ここでは前文 p に対して indeed 以下の q は p に同定されたうえで p の強化したヴァージョンである p+として解釈される (idem)。このようにして強化、言い換えれば、「言いつのり」の価値が構築されている。また、(8b)の in fact は「コントラストあるいは反駁 (contrast or refutation)」の価値を持つとされる (p.150-151)。この例でははっきりと in fact の前後に「軽率・非現実的と思われているが、実際にはすでに受け入れられている」という趣旨の対立がみられる。ここでは in fact により p と q は異化の関係に置かれ、結果的に p に対して q は non-p としてふるまっている (idem)。

(8) a. The success did not come because Mr Major mastered technique. *Indeed*, his technical electioneering skills remained rather weak. (p.146)
b. While this might seem rash or unreal to some, it is *in fact* already an accepted idea, supported by such prophetic figures as John Muir, Fraser Darling and Percy Unna. (p.150)

このような「同化」と「異化」という 2 つの標識の操作上の違いをふまえて、共起関係について検討すると興味深い事実が浮かび上がる。各標識の左直前にある接続語を調査すると、indeed は nor, or といった前に置かれた表現と同じ領域に後続表現を同定するマーカーや 2 つの表現を同じ領域に置くマーカーである and と親和性を持つのに対して、in fact は whereas, whether, but といった 2 つの表現の概念的な対立を表すマーカーと親和性を持つことが明らかになっている (p.158-159)。つまり、それぞれの形式の FS と機能的に親和するマーカーが各標識と共起しやすいことがコーパス調査から明らかになっている。

このようにして、FS に関する議論とコーパス調査は本書において強く関連付けられている。筆者は 8 章の結論において(9)のように述べている。ただの例文の収集という目的のみならず、FS の探求のためにコーパスを積極的に活用するという姿勢は、有望な方略であると考えられる。ただし、コーパスの使用そのものが本書の主目的ではなく、あくまで現象の一般化・メタ言語化という研究の方向性においてコーパスが活用されているとみなすべきである。このように積極的であると同時に目的と手段を混同しない慎重な姿勢でコーパスを用いることが肝要であると考えられる。

(9) The key point in the current approach is that the collocations and colligations of corpus queries are seen not merely as descriptive facts about a marker but as additional clues in the elaboration of its schematic form. […] I am convinced that such a perspective opens new horizons both for enunciative linguistics and for corpus-based approaches to language. (p.309)

3.2 語彙研究と談話標識研究の連接

次に取り上げる論点は語彙研究と談話標識研究の連接という論点である。談話標識はいくつかの形式の組み合わせによってつくられることがある。こういった構成をもつ標識を研究する場合

に各標識を構成する個別形式に関する議論を行うことで、当該標識に新たな角度から切り込んだ形での分析が可能になる。

本書でも例えば前節で取り上げた indeed / in fact を扱う 4 章の 4.5.5 においてこの問題が取り上げられている。4.5.5 では「思索的 (speculative)」という但し書き (p.168) のもとではあるが、通常の前置詞句としての用法をとりあげるなかで、deed と fact という語彙に関する記述を談話標識用法の記述に結び付けている。

まず deed に関しては、以下の例のような thought および words との対立が注目されている。そして、筆者はこの例にみられるような対立に「計画から実行へ (from *project* to *enactment*)」という特徴づけを与えている (p.169)。つまり、思考や言葉における潜在的な計画が具体的な実行に移されるという流れがこうした用例においては見出されている。このような特徴づけから(10c)のような談話標識としての indeed の用法 (ここでは強化の価値) に注目すると、「p から p+へ」という同定に基づいた流れが「計画から実行へ」という流れと並行的であることが確認できる (idem)。どちらの場合でも後件はすでに前件の中に潜在的に存在しているとみなすことができる。

(10) a. People may become violent *in thought* if not *in deed*. (idem)
b. This unity must be solidly established *in deed* and not only *in words*. (idem)
c. Most managers have not viewed these new areas of investment with great enthusiasm. *Indeed*, few funds have been launched. (idem)

一方で fact については、以下のように fiction との対立が注目されている。この fact と fiction の対立は非連続的であるといえる (p.170)。この対立では fiction の中に fact へと至る萌芽が潜在しているわけではなく、あくまでこの 2 つの概念は分かれて存在している。このことは、in fact が談話標識の用法において異化をマークしていたことと並行的である。

(11) They depicted them — both *in fact* and *in fiction* — as priestly sages of the type the East was expected to produce. (idem)

このように本書では談話標識を構成している個別語彙に関しても観察を行うことで、談話標識用法について設定されていた FS を語彙論にも接続して議論を行うことの可能性が示唆されている。形式の同一性に注目するのであれば、語彙の議論と談話標識の議論を結びつけることは当然求められる。また、こうした研究の連関を探る議論は談話標識に関する議論を検証する上でも有効であると考えられる。さらに、方法論としても、ある談話標識について FS を仮説として設定する際に、当該標識を構成している語彙の特性に着目することは 1 つの切り口として有望であるといえる[10]。

[10] こうした方向性において興味深いのはフランス語の前置詞句型談話標識を扱う Rossari (1997) や Paillard

4. おわりに

本稿は Ranger (2018) を総論的な「多機能性と FS 論 (2.)」と各論的な「談話標識研究におけるコーパス調査 (3.1)」「語彙研究と談話標識研究 (3.2)」という 3 つの角度から論評した[11]。2. においては関連する研究からの引用も行い、FS 論に関して考察を行った。

本書は理論的にも記述的にも示唆に富むものであり、アプローチや研究対象言語の相違によらず、広く談話標識に関心のあるものに読まれるべき研究書である。たしかに本書が採用する発話理論は談話標識研究全体から見れば少数派のアプローチではある。しかし、少数派・多数派という量的な対立にばかり気を取られることには研究を行う上では自制的である必要がある。あくまでまずは様々な接近方法の可能性を開いたうえで、相互の対話・批判を行うことが健全な研究風景であると考えられる。また、談話標識という他のカテゴリーと比べれば、(そもそものクラスの設定可能性を含めて) まだまだ課題の多い研究対象を扱うためには、少数の固定したアプローチだけでは不十分であり、数多くの接近方法からの研究を行い、常に＜他＞ (理論, 方法論, 研究対象言語[12], etc.) との対話を行うことがかかせない。このような＜他＞との対話の場を提供することが、本書が持ちうる大きな機能として期待できる。

参考文献

青井明 (1978) :「アントワーヌ・キュリオリの言語理論」『フランス語学研究』12, pp.87-97.

青井明 (1980) :「キュリオリの言語理論・補遺」『フランス語学研究』14, pp.92-101.

青木三郎 (1994) :「アントワーヌ・キュリオリの発話理論」『フランス語学研究』28, pp.61-66.

伊藤達也 (2015) :「語彙意味論に適する『相互依存的』構成性について」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』48, pp.135-143.

タンバ, イレーヌ (2013) :『新版 意味論』大島弘子訳, 白水社.

髭郁彦, 川島浩一郎, 渡邊淳也 (2010) :『フランス語学概論』駿河台出版社.

フックス, カトリーヌ, ル・ゴフィック, ピエール (2003) :『現代言語学の諸問題 第 2 版』田島宏, 渡瀬嘉朗監修, 三修社.

松尾文子, 廣瀬浩三, 西川眞由美編 (2015) :『英語談話標識用法辞典』研究社.

Benveniste, É. (1948) : *Noms d'agent et noms d'action en indo-européen*, Adrien-Maisonneuve.

(2015) の研究である。依拠している枠組みはそれぞれ異なるが、どちらの研究でも前置詞論が談話標識の議論に取り入れられている。

[11] 無論、本稿が取り上げたもの以外にも本書において注目すべき論点は数多い。特に筆者が社会言語学的な関心をもって研究を行っていること (cf. 6 章) と文法化といった通時的研究との接点を積極的に探ろうとしている点は注目できる。発話理論の立場からフランス語の談話標識研究を行っている Paillard (2021, p.19) はむしろ文法化や語用論化の概念からは意図的に距離をとっており、この点に双方の研究の違いが見出せる。

[12] 発話理論にもとづく談話標識研究においては多言語を対象とした研究が重要な流れとして存在する。特に注目できるのは談話標識研究を長年行っている Paillard を中心に編集された *Langages* 207 号 (cf. Paillard 2017) である。この特集号には日本語を含む様々な言語の談話標識に関する論考が所収されている。

Blakemore, D. (2006) : « Discourse Markers », Horn, L.R. et G. Ward (éds) *The Handbook of Pragmatics*, Blackwell, pp.221-240.

Bouscaren, J. et al. (1992) : *Introduction to A Linguistic Grammar of English : An utterer-centered approach*, Ophrys.

Culioli, A. (1985) : *Notes du séminaire de DEA : 1983-1984*, Université Paris 7 Département de recherches linguistiques.

Culioli, A. (1995) : *Cognition and Representation in Linguistic Theory*, John Benjamins.

Dostie, G. (2004) : *Pragmaticalisation et marqueurs discursifs*, Duculot

Fischer, K. (2006) : « Towards an understanding of the spectrum of approaches to discourse particles : introduction to the volume », Fischer, K. (éd) *Approaches to Discourse Particles*, Elsevier, pp.1-20

Franckel, J-J. (2002) : « Introduction », *Langue française*, 133, pp.3-15.

Groussier, M-L. (2000) : « On Antoine Culioli's theory of enunciative operations », *Lingua*, 110, pp.157-182.

Hansen, M-B. M. (1998) : « The semantic status of discourse markers », *Lingua*, 104, pp.235-260.

Paillard, D. et al. (2012) : *Inventaire raisonné des marqueurs discursifs du français : Description-Comparaison-Didactique*, Editions Université Nationale de Hanoi.

Paillard, D. (1998) : « Les mots du discours comme mots de la langue », *Le Gré des Langues*, 14, pp.10-41.

Paillard, D. (2015) : « Les locutions *en + N* dans leurs emplois comme marqueurs discursifs », *Scolia*, 29, pp.97-114.

Paillard, D. (2017) : « Comparaison des marqueurs discursifs : introduction », *Langages*, 207, pp.5-16.

Paillard, D. (2021) : *Grammaire discursive du français : Étude des marqueurs discursifs en* -ment, Peter Lang.

Ranger, G. (2018) : *Discourse Markers : An Enunciative Approach*, Palgrave Macmillan.

Rossari, C. (1997) : *Les opérations de reformulation*, 2e, Peter Lang.

Schourup, L. (1999) : « Discourse Markers », *Lingua*, 107, pp. 227-265.

（みやこし　しゅん / 筑波大学大学院）